

# コノミスト賞 決定

# 佐藤主光氏に

エコノミスト賞  
選考委員

●委員長 奥野 正寛（流通経済大学教授）  
●委 員 伊藤 邦雄（一橋大学教授）／井堀 利宏（東京大学教授）  
小川 一夫（大阪大学教授）／吉野 直行（慶應義塾大学教授）



『地方税改革の経済学』

佐藤 主光 著 (日本経済新聞出版社)

さとう もとひろ●一橋大学大学院経済学研究科・政策大学院教授。1969年生まれ。一橋大学経済学部卒業。同大学経済学研究科修士課程、博士課程修了。クイーンズ大学大学院(カナダ)経済学研究科博士課程修了(Ph.D.取得)。一橋大学経済学研究科講師、助教授、准教授などを歴任。専門は財政学。共著書に『地方財政論入門』(新世社)、『地方交付税の経済学』(有斐閣)、『震災復興』(日本評論社)などがある。

## 地方税改革の 経済学

佐藤主

三六四

税改革の具体的提言を行う第8～10章は出色だ。

現行地方税制の問題点として、法人2税（法人住民税と法人事業税）への過度の依存、国と地方の間の不明瞭な財政責任を取り上げ、これら的是正を中心とした地方税制の再構築や、財源保障と自治体間の格差是正機能が混在する財政移転制度の見直しが提案される。地方交付税を地方政府固有の財源と位置づけ、負担の所在を明確にするための交付目的税の創設である。

地域住民が負担してこそコスト意識が明確に認識され、地方自治体の監視・規律付けが可能になり、住民自治の向上につながることも指摘する。また、低所得者への配慮や社会的に重要な公共サービスの責任は、国が負うべきだと主張する。

もつとも選考委員会では、本書の提言の大部分がすでに複数の研究者との共同提言として発表されており、独自性が薄いのではないかとの

は、翁邦雄『ボストン・マネタリズムの金融政策』、櫻井宏一郎『市場の力と日本の労働経済——技術進歩、グローバル化と格差』である。

翁氏の著書はマネタリズム以来インフレ目標政策やティラールール、さらにはデフレ脱却のためのもうけりうる政策群など、中央銀行の金融政策の変遷と政策課題を、平易かつ明快に解説している。歴史的視点と現代的視点を織り交ぜた記述や、バルブルに対処する考え方としてのFee View（後始末戦略）・JBIS View（風に逆らう戦略）の利点と欠点の解説も明快で、現代的意義の大きいバランスの取れた好著と高い評価を受けた。ただ、既存の研究や見解をまとめていることは評価できるものの、筆者自身の独自の分析がこれまであるか、疑問が強かった。また、著者が所属していた日本銀行の見解に引きずられていてる著述が目立つ点もマイナスとなつた。

はめて丹念に実証分析した研究書である。現代的な問題意識と手堅い分析手法を背景にした、アカデミックにも高い水準の研究が選考委員から高く評価された。だが、外国での分析手法をそのままわが国のデータに当てはめた研究が多く、独自性が弱い点や、グローバル化の影響に注目しながらも、非熟練労働集約的な工程を低賃金国にアウトソーシングするという、空洞化的分析が欠落している点などが、マイナスとなつた。

この他に選考委員会で話題になつたのが、加藤俊彦『技術システムの構造と革新——方法論的視座に基づく経営学の探求』である。本書は、これまでの経営学の研究を方法論的に整理し、「決定論—適応」と「主義—革新」という2つの方法論的系譜を対置させながら、最終的に両者を融合する新たな視座を提供した著作である。ただ、エコノミスト賞の性格への適合性が薄いと判断され、選考からはずされた。

(2、5、7章)、②評価と理論分析(3、4章)、③政策提言(8～10章)の3つのステップに分けて考える。その中でも、経済学を使って政策問題を論じるイロハを明快に解説した第3章、地方税を考える上で経済学の basic 概念を包括的に解説した第4章

懸念も示された。しかし、本書全体を通じて地方税改革論が多面的・中立的に展開され、理説展開が精緻である一方、論述が平易・丁寧で、専門家以外にも理解しやすいインパクトのある書物であることが高く評価され、受賞に至った。

の技術進歩（スキル偏向技術進歩）や途上国との貿易拡大に代表されるグローバル化が、先進国において未熟練労働（生産労働）に比べた熟練労働（非生産労働）に対する需要を高め、それが両者の間の急激な経済格差拡大につながったという198

# 新古典派経済学の視点から 切り込んだ啓蒙書

講  
評



選考委員長  
おくの まさひろ  
奥野 正寛

52回（2011年度）エコノミスト  
賞の受賞作に佐藤主光著『地方税  
改革の経済学』（日本経済新聞出版  
社）を選んだ。授賞式は4月23日に  
開催予定。佐藤氏には賞金100万  
円と賞状、記念品、出版元の日本経  
済新聞出版社に賞状と記念品を贈る。  
対象作品は11年1～12月に刊行さ  
れた著書・論文。有識者・読者アン  
ケートや主要出版社の推薦作品を踏  
まえ、選考委員会で審査を行つた。

本経済新聞出版社)、櫻井宏二郎『市場の力と日本の労働経済——技術進歩、グローバル化と格差』(東京大学出版会)の3作に絞られた。ハイレベルな選考が展開されるなか、「地方税に焦点を当て、経済学の手法を持ち込んだ新しい分析」(奥野正寛委員長)と、受賞作に各選考委員の高い評価が集まつた。

ツトが当たることが増えていた。本書は、そこで最も不可欠な地方税について、経済学の視点から切り込んだ力作。地方税の複雑な制度をわかりやすく解説している点も魅力だ。

エコノミスト賞は、1960年に創設。日本経済および世界経済について、実証的・理論的分析に優れた作品に授与される。歴代受賞者からは多くの有為な人材を送り出し「経済論壇の芥川賞」と称される。